

# 佛性

平 川

彰

佛性とは、佛となりうる性質、佛とひとしい性質のことです。しかし佛性をそなえるのは、佛陀ではなくして、まだ成佛していない菩薩であります（佛陀の場合は、佛性と言わないで、法身と言います）。あるいは「一切衆生に悉く佛性あり」といいますが、すべての人に佛性があるといえます。しかし佛陀でない人が、佛陀とひとしい性質をそなえるとは、どういう意味でしょうか。佛陀とひとしい性質をそなえていたら、すでに佛陀であるべきであると考えられるから

です。ここに「佛性の教理」のむつかしい点があります。この理解を誤ると、とんでもない解釈をするようになります。ともかく佛性は、佛とひとしい性質であるといいますが、まだ「未成熟」でありまして、将来佛陀になりうる性質という意味です。たとい佛性があるといいますが、そのまま佛陀であるのではないのでして、凡夫が成佛するまでには、長い間の修行が必要であります。この修行を見落して、佛性と佛陀とを短絡しますと、因果撥無の邪見に



陥る危険があります。たとえば洪柿はそのままではしばらく食べられません、しかし木の上にそのままおいて、秋の太陽に照らされ、つめたい秋風に吹かれて熟すれば、甘い柿に変わります。酒でも味噌でも同じことでして、仕込んだその時には、酒や味噌はできていないのです。適当な期間の熟成を経て、おいしい酒や味噌ができるのです。

佛性についても同じことが言えるのでして、凡夫に佛性があるとと言っても、凡夫がそのまま佛陀であるということではないのです。しかし凡夫に直ちに佛陀たることが認められないから、佛性はないというのも極端な説です。瓦を磨いても金にはならないように、佛性がなければ、いくら修行をしても成佛はできない道理です。佛性があるから、凡夫でも修行をすれば、成佛できるというのであります。それならば、佛性の「性」というのはどういふものでしょうか。

この点に關しまして華嚴の十地經には、菩薩が「大悲をはじめとする」等の十種の心の助けをかりて、菩提心（成佛を望む決心）を發起しますと、凡夫地をこえて、如来の家に生まれて、如来の性を得て、歓喜地に住すると説いております。如来の家に生れると、如来の子になるのですか

ら、如来とひとしい性質をそなえるのです。そして成長すれば「法王子」となり、つぎには諸佛の灌頂を受けて、佛の位に即くのです。したがって成佛を目ざす行者には、「如来の家に生れる」ということが重要なわけです。

この如来の家に生れることを、十地經では「如来の種性（ヴァンシヤ）をそなえる」と言っています。「ヴァンシヤ」とは「血統」の意味でして、例えば婆羅門の家に生まれた者は、婆羅門の種性（ヴァンシヤ）が得られますし、クシャトリア（武士階級）の家に生れた者はクシャトリアの種性を得ます。この性を「種性」と言います。このように如来の家に生れた者は、如来の種性を得まして、それまでそなえていた「凡夫の性」を捨ててののです。十地經では十地を説いています、その初地である歓喜地に入ることによつて、凡夫地を捨てて、如来の種性（ヴァンシヤ）を得ると言っています。この「如来の種性」は、「如来の性（ダーツ）」とも言うのでして、「ヴァンシヤ」と言うのも、「ダーツ」（或いはゴートラ）と言うのも、この場合には意味に違いはないのです。大切なことは、この言葉を誤らずに理解することです。「佛のダーツ」を「佛性」と訳しているのです。

したがって嚴密に言えば、菩薩が歡喜地に入ったときに、佛性をそなえることになりませんが、しかしさきにも言いましたように大乘の涅槃經では、「一切衆生に悉く佛性あり」と言っています。凡夫の時にすでに佛性がそなわっていると言っています。その理由は、聖者に佛性があるならば、すでにその人が凡夫であった時にもそれに類する性質がある筈であると考えまして、さらにそれをつきつめて考えて、「一切衆生に佛性あり」と主張したのであろうと思います。これと同じ思想は華嚴經にもあるののでして、華嚴經の「梵行品」には「初発心の時に便すなわち正覚を成ず」と言っています。「初発心」というのは「初発心住」といって、十住の位の最初を言うのです。菩薩の位には、凡夫の時に十住・十行・十廻向の三十位がありまして、さらにそれを超えて修行が進むと聖者の位である「十地」があります。最初は初地の「歡喜地」に昇るのです。そして十地を満たすと、十地をこえて等覚の位に達し、一転して佛の位（妙覚）にのぼるわけです。故に「初発心住」は、菩薩の修行における最初の位ですから、極めて低い位であるわけです。

しかしそれは上位の位と比較して見るからそうなるので

して、初発心住だけを考えてみますと、初発心、すなわち「はじめて真正の菩提心を発す」ということは容易にできることではないのです。人は、佛教に信心を得て、佛教徒になるとき菩提心を発おこす人があるでしょうし、或いは在家庭生活を捨てて、出家をするときに菩提心を発す人もあるでしょう。そのほかにもいろいろの機縁で菩提心を発す人があると思います。しかし大部分の人は少しの困難にあえばたじろいで、菩提心を捨ててしまいます。舍利弗が菩薩の修行をしていたとき、意地の悪い婆羅門から目をくれと言われて、片目をくり抜いて与えたのですが、そのあと婆羅門の仕うちに一瞬怒りの心がおこり、菩薩の修行はむづかしいと言って、大乘から退転した話は有名です。

真正の菩提心を発す初発心住の前には十信の位がありまして、この段階で信心を修行するのですが、それに一万劫を要すると言われています。この長い修行の結果、信心が決定して、菩提心を発すのですから、この菩薩の発す菩提心の堅固なことは、何物にも比較できないのでして、佛陀といえどもこの決心を変えさせることはできないと言っています。このような堅固な発菩提心ですから、功德が大きく、またその堅固なことを示すために「初発心の時に便わ

臨時増刊  
在家佛教

特集  
生と死  
現代人の人生観  
苦と楽

各冊 ¥1,030 71

朝比奈宗源	井伊	文子
梅原 猛	雲藤	義道
江部 鴨村	大西	良慶
大山 澄太	萩原	井泉水
長田 恒雄	勝又	俊教
加藤辨三郎	金子	大榮
亀井勝一郎	久保田	正文
椎尾 辨匡	柴山	全慶
清水 公照	杉 靖	三郎
鈴木 大拙	曾我	量深
竹田 益州	竹中	信常
竹山 道雄	玉城	康四郎
中根 專正	中村	元明
那須 政隆	奈良	康治
西川 玄苔	西谷	啓昇
西元 宗助	東 平	沢 興
平川 彰	沢 平	達朗
藤井 実応	藤島	多 彰
古田 紹欽	本松	林 惠
増谷 文雄	大田	山 無
松本 大	山 結	城 令
山田 靈	林 秀	雄
吉野 秀雄		

在家佛教協会

東京都千代田区大手町1-6-1

郵便番号100

電話03-3214-5024 振替東京0-17765

「正覚を成す」と表現しているのだと考えます。

さらにまたものごとは、原因の方から結果を見ますと、結果は不確かですが、結果の方から原因を見ますと、原因の時に結果はきまっていたと考えやすいものです。例えば博士号を得るために研究をはじめるとしても、はじめた時には果して博士号が得られるかどうか、自信はないと思います。しかし首尾よく博士号をもらって、あとから考えますと、自分には研究をはじめめる時から、それだけの能力は十分にあったと考え易いものです。

このように成佛についても、原因から考えるのと、結果から考えるのでは、見方が変わるものとして、佛性ありという考え方は、すでに成佛を達成した佛陀の立場から、修

行をはじめた初発心の時を見るのです。ですから、初発心の時にすでに正覚する力がそなわっていると見るようになるのです。

故に「すべての衆生に佛性がある」ということは、佛陀の立場から見て言い得ることであります。凡夫自身がそのように主張する資格はないのです。凡夫が自分の心をすみからすみまで探してみても、佛性というような貴いものを見出すことはできないと思います。凡夫の心は、貪りやいかり、無知、慢心や嫉妬等のみにくい煩惱に満ちあふれていて、まして、どうひいき目に見ても、自分の心に高貴な佛性があるなどと断言できるものではありません。ですから自分の心に佛性があるなどと考えて、問題を提起しますと現実か

ら遊離した議論になってしまおうと思います。何故なれば、佛性の何たるかを知らないで、佛性の有無を論議することになるからです。ですから現実には足をつけて、自分の体験を踏みはずさないで、論議することが大切であると思います。

但し涅槃經には「十住菩薩は八聖道を修して、少しく佛性を見る」と説いておりまして、真実の発心をした初發心住の菩薩以上になりますと、佛性がどんなものか、少しはわかると云うのです。ですからそれ以前の「十信の菩薩」や、さらにそれ以前の凡夫は、「悉く佛性あり」という如来の言葉を信するだけであると、勝鬘經に説いております。十信までの菩薩を、大乘起信論には「不定聚」の菩薩と呼んでいます。これはまだ信心を修行中で、信心が決定していないからです。したがってわれわれ凡夫は、凡夫にも佛性があるという佛語を信じて、修行をすべきであります。故に涅槃經には「大信心は佛性なり」と説いています。真実の信心を得た人は、その信心の中に佛性の何たるかを知ることができるといふ意味です。

親鸞聖人はこの涅槃經の教えに基づいて、次のような和讃を作っております。即ち「信心よるこぶその人を、如来

とひとしときたもう。大信心は佛性なり、佛性すなわち如来なり」と詠んでおられます。これは涅槃經の經文よりも、一步ふみこんだ解釈であると思います。「大信心は佛性なり」は涅槃經の言葉ですが、それにもとづいて「佛性すなわち如来なり」と言っておられるのは、これより一步進んだ言葉です。さらにそれにもとづいて、信心を喜ぶ人は「如来とひとしい」と言っておられるのです。この言葉も華嚴經にもとづいていると言われています。

しかし親鸞聖人はさらに「無導光の利益より、威徳広大の信を得て、必らず煩惱の水とけ、すなわち菩提の水となる」と説かれ、さらに「罪障功徳の体となる。水と水の如くにて、水多きに水多し、障り多きに徳多し」と詠んでおられます。「無導光の利益」すなわち無導光如来(阿弥陀佛)より与えられた大信心の力によって、煩惱の水がとけて悟りの水に転換する。故に罪障と悟りとは本性においては別のものではない。煩惱の盛んな人ほど、悟りの量も大きいのである。故に大信心だけでなく、罪障までもふくめて、佛性を理解すべきであるというのが、親鸞聖人のお考えではないかと思えます。われわれもこの親鸞聖人の立場で佛性を受けとめるべきであると思えます。(東京大学名誉教授)